

不妊治療における卵管鏡下卵管形成術の役割について ～ART移行前の有効な治療としての位置づけ～

園田桃代ARTクリニック

小柳 良子、小林 正知、関和 輝、髙友希、上田尚美、森中美友、川本 真、
羽別 さゆき、桑原 聖子、濱田 亜紀、園田 桃代

緒言

ARTが普及する中、卵管鏡下卵管形成術 (falloposcopic tuboplasty: FT) は直接卵管の病因を解除し一般治療での妊娠を可能にする。FT施行例における妊娠に寄与する因子、FTの有用性を検討した。

対象と方法

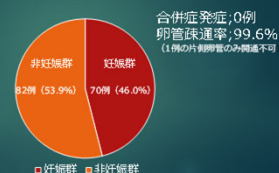
子宮卵管造影検査で卵管閉塞または狭窄にてFT施行した152例で妊娠群と非妊娠群に分け、年齢、不妊期間、AMH値、クラミジア感染の合併、子宮内膜炎の合併、FT時の卵管内所見を検討。累積妊娠率をKaplan-Meier法にて算出した。

FT時卵管内所見

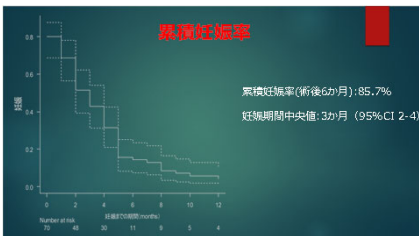
	間質部	峡部	膨大部
妊娠群 126卵管	4卵管 (3.2%)	57卵管 (45.2%)	105卵管 (83.3%)
非妊娠群 136卵管	4卵管 (3.0%)	37卵管 (27.4%)	116卵管 (85.9%)

峡部:P=0.003

FT施行:152例



累積妊娠率



	年齢	不妊期間	AMH値	クラミジア感染	子宮内膜炎合併
妊娠群	33.3±3.5歳	12.0か月 (1-107か月)	2.825 (0.02-15.4)	4例 (5.7%)	3例 (4.2%)
非妊娠群	33.6±3.8歳	15.5か月 (2-92か月)	2.780 (0.31-15.0)	5例 (6.0%)	12例 (14.6%)
	P=0.55	P=0.228	P=0.98	P=1.0	P=0.053

まとめ2

- FT時の異常所見部位は妊娠群、非妊娠群とも膨大部に多く、膨大部所見の有無は妊娠に影響ないと考えられる。
- FT時の峡部所見の有無は妊娠群と非妊娠群において有意差を認め、峡部所見にFTの有用性が高いと考えられる。
- 術後の妊娠期間中央値は3か月 (95%CI 2-4) で、85.7%が術後6か月までに妊娠成立した。

まとめ1

- 合併症はなく卵管開通率は99.6%と高かった。
- 年齢、不妊期間、AMH値、クラミジア感染の有無、子宮内膜炎の有無については妊娠群と非妊娠群において有意差は認めなかったが、子宮内膜炎は非妊娠群において高い傾向であった。

結語

FTによる卵管通過性の改善は術後6か月という期間にART移行前の一般治療を行う上で有用な治療である。